兵庫県立美術館開館15周年記念　著名人連続講演会第1回

兵庫県立美術館が今年で開館15周年を迎えた。これを記念して建築、先端技術、伝統芸能、美術の第一人者を迎え、現在の取り組みから将来の夢について語る「著名人連続講演会」が月から11月にかけて計4回シリーズで開かれている。テーマは「21世紀の君たちへ」。第1回目がこのほど同美術館ミュージアムホールで開かれ、建築界のノーベル賞と称されるプリツカー賞を日本人女性として初めて受賞した建築家の妹島和世氏が近作に込めた思いについて語った。

世界に溶け込む空間を

日本人女性初・プリツカー賞受賞者　建築家・妹島和世さん語る

「内」と「外」の境界をつなぐ

自分で建築の仕事を始めて30年になる。その間、内部空間と外部空間の境界をつなげたいとずっと考えてきた。室内空間とその周りに広がる都市空間、さらにその先に広がる環境に対してスムーズな関係を持つ場所というのが多様な人々が一緒に生活できる空間だと思うし、まちも楽しく、ダイナミックな場所になると思う。もともと日本の住居にはひさし、縁側、庭があって外部を借景にするなど自然につながっていく空間で暮らしていた。そのようなことをあらためて勉強しながら考えている。

教育機関

近年手がけたいくつかの建築物を紹介する。2010年から使われているスイス連邦工科大学ローザンヌ校ラーニングセンターは、勉強している人たちが自然に出合って会話ができたら新しい発想が広がっていくという考え方のもとに設計した。

広大な敷地に巨大な平屋のワンルームを造った。建物は地面からスロープ状に上がったりトがったりして、二つの丘で三つの場所に分け、それぞれにホールや図書館、レストランなどを配置している。丘の部分からはレマン湖も望むことができる。コンクリートが重いので軽量化するために造った穴を中庭にしたり、自然の風や光を採り入れ、内部でも生じる音や食堂の臭いなどをどうコントロールするかなどワンルームゆえに生じる構造的な課題を克服しながら形が出来上がっていった。

このプロジェクトを通じ、周りを大きな外部空間として大きくとらえるだけでなく、湖や幼稚園、カフェなど外部の微妙な差異に丁寧に反応するつながり方を考え始めるようになった。

美術館

並行して、ルーヴル美術館の別館を、炭鉱のあった町ランス（フランス）に建てた。トロッコの線路跡、採掘穴、着替え小屋など残っているものや高低差がある地形をそのまま生かすよう考えた。ローザンヌの教訓を生かし、初めからいくつかに分けてその場所に反応して造った建物をつなげていこうと考えた。壁にはアルミの鏡面の材料を使い、れんがの建物や緑を映りこませ、その場所に溶け込ませるようにした。

集合住宅

京都市で10世帯が住める集合住宅を手がけた。市の規制で勾配屋根が決められているエリアだった。一つの家が三つの片流れの屋根を持っていて、そのうちの二つは隣の家と屋根を共有することで10軒がつながるようにし、一つの集合住宅を造ることにした。地下の駐車場から上がった屋根のない中庭は3、4軒ごとに共有し、各戸の勝手口につながるようになっていて、今では交流も生まれている。

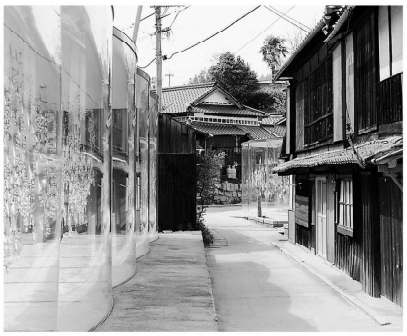
島の集落

瀬戸内海の犬島（岡山県）で10年前から取り組んでいるプロジェクトがある。今までは環境にどうやって建築を開いてつなげていくかを考えていたが、環境の一部になれるようなものを造れないかを考えるチャレンジングなプロジェクトだ。犬島は周囲3キロ強の小さな島で人口35人、平均年齢80歳ほどの島だ。

通常の建築の設計は、初めにマスタープランがあって、そこで生じる問題を考え、解いていく作業なのだが、犬島では枠を設けず、何が必要かというところから始めて広がっていっている。古民家を解体して使える部材は生かし、新しい部材を交ぜ合わせてギャラリーに改修した。集落そのものが美術館という考え方で、ギャラリーは今五つに増えて定期的に作品を入れ替えて展示している。アーティストや建築職人がある時期滞在し、もともとあった温室に移ってきて事業を始める人も出てきた。そこでいくつかの宿泊場所も整え始めた。そこに地元の人が採れた野菜を持ってくるなど交流も生まれている。

今まで環境は与えられるもので太刀打ちできるものではないと思っていたが、住んでいる自分たちが変えていけることもあるのではと教えられた気がしている。最近ではその場所の一つの風景になればという思いを持ちながら建築を考えている。

せじま・かずよ　アクリルやガラス、金属板、木などの素材を用いて空間と人が緩やかに接続し合う建築設計で知られる。1987年に妹島和世事務所を設立。2010年に「建築界のノーベル賞」と呼ばれるプリツカー賞を日本人女性として初めて受賞。主な建築作品に金沢21世紀美術館、ルーヴル美術館の別館「ルーヴル・ランス」など。



↑犬島「家プロジェクト」©Kazuyo Sejima and Associates, "reflectwo" courtesy:Haruka Kojin(SCAI THE BATH HOUSE)　↑「グレイス・ファームズ」©IwanBaan

■今後の講演予定■

著名人連続講演会は、今後以下のスケジュールで開催が予定されている。

第2回は医療用ロボットとマイクロマシンの世界的先駆者として知られる東京大学工学部教授の生田幸士氏＝7月29日（土）、午後1時半～3時。

第3回はジャズ、絵画、料理など多彩な趣味を持つ落語家の桂南光氏＝9月6日（水）午後3時～4時半。

第4回は、さまざまな素材とテクノロジーを駆使した彫刻の新たな可能性に挑む彫刻家の名和晃平氏＝11月19日（日）午後1時半～3時。

聴講無料（要整理券、各回、当日午前10時から同美術館内カフェ前で配布）。定員300人。

「ルーヴル・ランス（ルーヴル美術館別館）」©Kazuyo Sejima+Ryue Nishizawa／SANAA, Tim Culbert+Celia Imrey／IMREY CULBERT, Catherine Mosbach

蓑豊館長あいさつ

2002年4月に開館した兵庫県立美術館は、今年で15周年を迎えます。開館以来、これまでに76の特別展を開催し、展覧会以外にも、コンサート、映画、落語会、美術講座を実施するなど、県民に開かれた参加・体験する美術館として歩みを進め、さまざまな形で皆さま方にご活用いただいてきました。

本年は、関西を代表する企業のご支援を賜り、建築、先端技術など世界の第一人者を講師にお招きし、シリーズで講演会を開催します。第1回は世界を股にかけて活躍されておられる建築家の妹島和世さんにお話しいただきました。今後は東京大学工学部教授の生田幸士さん、落語家の桂南光さん、彫刻家の名和晃平さんに、現代取り組んでいるプロジェクトや将来の夢についてお話いただきます。

これからも兵庫県立美術館をどうぞよろしくお願いします。

参加・体験の扉を開く

今年開館15周年を迎えた兵庫県立美術館

斬新な企画 今後も続々

兵庫県立美術館で現在開催されている特別展が「ベルギー奇想の系譜展　ボスからマグリット、ヤン・ファーブルまで」（7月9日まで）。初期フランドル派の画家ボスは奇怪な生き物に満ちた幻想的な絵で知られている。その系譜を継ぐ奇想の絵画、版画、彫刻など約120点を紹介している。次に予定されているのが「怖い絵」展（7月22日～9月18日）。中野京子氏のベストセラー「怖い絵」に着想を得た企画で、中野氏が取り上げた作品をはじめ主に近代ヨーロッパの絵画を中心に神話、現実、歴史といったテーマごとに紹介する。併催の「県美プレミアム」では「美術の中のかたち一手で見る造形　青木千絵展　漆黒の身体」（7月8日～10月15日）を開催予定。

「ベルギー奇想の系譜展」より

ヒエロニムス・ボス工房《トゥヌグダルスの幻視》1490－1500年頃　ラサロ・ガルディアーノ財団蔵　©Fundación Lázaro Galdiano

一般財団法人 安藤忠雄文化財団
TADAO ANDO CULTURAL FOUNDATION
asics
THE WESTIN AWAJI ISLAND RESORT & CONFERENCE CENTER
神戸風月堂
sysmex
SHIMABUN
神鋼不動産株式会社
もっと、美味しく、美しく。日本盛
もう半世紀すこやかに SunCity
学校法人 阪急学園
みなと銀行
The Mirai Salad Company ROCK FIELD